演劇における演技計画の構想と社会的能力の関連性
Relationship between Performance Planning for Theatrical Acting and Social Abilities

渡邊 智也[†‡], 楠見 孝[†]
Tomoya Watanabe, Takashi Kusumi
[†]京都大学, [‡]ベネッセ教育総合研究所
Kyoto University, Benesse Educational Research and Development Institute
watanabe.tomoya.1994@gmail.com

概要
本研究は, 物語の登場人物を演じる演劇体験のうち, 物語を読んでどのような演技をするのか構想する「演技計画」を行うことの, 他者の心的状態を推測する能力や共感への促進効果を検証した. 大学生 82 名を対象とした実験の結果, 物語を読んでその内容を要約した戯曲要約群と比較した演技計画の促進効果は見られなかった. 一方で, 演技計画群が経験した戯曲の物語への移入の強さは, 視点取得能力の向上を促進することが示された.

キーワード：演劇(theater), 演技(acting), 物語読解(narrative reading), 共感(empathy), 物語への移入(transportation into narratives)

1. 問題と目的

物語の登場人物を演じる演劇体験が, 他者との相互作用を支える他者理解能力（他者の心的状態を推測し, 理解する能力）や共感（他者の感情状態を共有する能力）などの社会的能力を育む手法として期待されている(Winner et al., 2013)[1]. 演劇が他者理解や共感への効果を生じるのは, リアルな演技を行うためにその心的状態を推測し, その感情を共有する経験が要求されるためという仮説がある（Goldstein & Winner, 2012）[2]. 演ずることの効果に関する認知科学研究として, 統制された認知課題上での役割演技が視点取得能力を促進することを示した古見・子安（2012）[3]や, 複数の俳優間の相互作用過程に注目した Sun & Okada(2023)[4]などがあり, 検討する演劇の複雑性を変化させながら多面的な検討がなされている.

渡邊・楠見（2021）[5]は, 演劇体験における, 特に個人の演技構築過程の影響に着目し, 上記の仮説を検証した. この研究では演劇を, 物語の筋を示し, 演技の題材となる「台詞と卜書き」からなる戯曲作品を読み（戯曲読解段階), どのような演技表現ができるかを構想し（演技計画段階), それを最終的に舞台上で観客を前に声や身体を使って具体的に表現する（演技遂行段階）という 3 つの段階で捉えられる活動とした（安藤, 2002[6]). 渡邊・楠見（2021）[5]では, このような演劇体験の 3 ステップ全体を経験する演劇体験は, 戯曲を読んだあとにその内容を要約する戯曲読解体験と比較して, 物語への移入が高い場合に限って, 他者理解（アジア版目から心を読むテスト: Adams Jr et al., 2011[7]; ヨニテスト: Shamay-Tsoory & Aharon-Peretz, 2007[8]）と共感（日本語版対人反応性指標: 日道他, 2017[9]）を高めるという結果を得た. 物語への移入は, 物語の世界のイメージの鮮明性や注意の集中を反映する概念である（小山内・楠見, 2016[10]; Green& Brock, 2000[11]). 演劇の効果を段階的に検証するため, 渡邊・堀・楠見(印刷中)[12]では最初の戯曲読解段階の他者理解・共感への促進効果を, ノンフィクションを読む場合と比較したが, その効果は認められなかった. 物語は一般に人間同士の社会的相互作用を描くため, それを読むことで登場人物の心情を推測し, 感情を追体験することが現実世界の他者理解と共感の疑似体験になるという仮説がある(Mar, 2018)[13]. そして, 戯曲は舞台作品の青写真と呼ばれ(Noice, 1991)[14], 心情表現の直接的な描写が多く省かれた, いわゆる余白の多い物語形式である. 渡邊他の実験操作は, 表現上の余白を埋めるように心情を能動的に推測することを求めるような文学的な作品を読むことが, そのような余白のない, または少ないノンフィクションや大衆向け娯楽作品を読む場合と比較して, 心情推論に基づく社会的相互作用の疑似体験を促進し, 他者理解能力を高めることを報告した研究（e.g. Kidd & Castano, 2013[15]）からの類推に基づいていた.

効果が認められなかった一つの可能性として, 演劇初心者にとって戯曲の表現上の余白を埋めるような心情推論は, 戯曲読解を行うだけでは困難であった可能性がある. 戯曲作品は, 表現上の余白から多様な物語解釈が許容されるため, 演出家や演劇俳優の解釈を通じて舞台作品としての表現の方向性を定める必要がある. 演技計画や演技遂行では, 演技表現を定め, それ

を実行するために，個人的経験の知識も活用して戯曲の理解を補完することで物語の解釈を限定したり，定めたりするプロセスが期待できるが，戯曲読解単独では表現が要求されないことで，このプロセスが要求されず，心情推論が促されにくい可能性があると考えた．

そこで本研究では，戯曲読解段階に注目した渡邊他に引き続き，演劇の 3 つのステップの影響を段階的に検証するため，どのような演技を行うか明確にする演技計画段階までを経験することの短期的介入の効果の検討を目的とした．演技計画の効果を検出するため，介入条件を演技計画群(実験条件)と戯曲要約群(対照条件)と設定した．演技計画の課題が，物語の解釈を限定したり，具体化したりするプロセスを強く要求するのであれば，そのプロセスが必ずしも期待されない戯曲読解に専念する課題を経験するよりも，他者理解や共感への訓練の効果を得やすいと考えた．演劇や物語小説の効果は，参加者が物語世界を鮮明にイメージできた場合により得られやすい可能性があることから(Bal & Veltkamp, 2013[16]; Calarco et al., 2017[17]; 小山内他, 2019[18]; 渡邊・楠見, 2021[5])，本研究も移入の強さによる促進効果を想定した．結果の予測として，第一に「物語への移入が強い場合に，演技計画群の他者理解・共感得点が戯曲要約群と比較して高くなる」，第二に戯曲の物語イメージの鮮明性が演技計画時の社会的相互作用の疑似体験を促進すると想定し「演技計画群での物語への移入の強さが他者理解と共感の向上を促進する」と考えた．

2. 方法

参加者 Crowd Works に登録している，演劇の集中的な訓練経験のない大学生および大学卒の 18~34 歳の 82 名（*M*age=26.6, *SD*=4.5）が参加した．

要因計画 参加者内要因である測定時（事前テスト・事後テスト），参加者間要因である介入要因（演技計画群，戯曲要約群）の 2 要因混合計画であった．参加者は 2 群のどちらかに無作為に割り当てられた．

文章材料 練習用戯曲として『転校生が来る』（平田オリザ, 2002[19]），本番用戯曲として『父帰る』（菊池寛, 1917/2016[20]）を用いた．

使用尺度 他者理解能力の効果指標として，アニメキャラクターである「ヨニ」の表情とその周囲の物体等の情報からヨニに対する視点取得を要求するヨニテスト(Shamay-Tsoory & Aharon-Peretz, 2007[8]), 感情表情の視線部分の画像からその人物の感情理解を要求するアジア版目から心を読むテスト(Adams Jr. et al., 2010[7])を用いた．共感の効果指標として，質問紙尺度である日本語版対人反応性指標の共感的関心尺度（日道他, 2017[9]）を用いた．戯曲の物語の移入状態の尺度として，日本語版物語への移入尺度（移入尺度とする）（小山内・楠見, 2016[10]）を用いた（7 件法）．また，実験介入終了後，演技計画課題・戯曲要約課題の主観的な困難度（1 項目）を 5 件法で尋ねた．その他，いくつかの共変量を測定する質問紙を用いたが本稿での報告は省略する．

手続き オンラインで jsPsych を用いて 2 日間にわたって個別に実施された．実験全体の説明と参加への同

表 1 群ごとの得点の平均値（*SD*）

	事前得点		事後得点	
	演技計画群	戯曲要約群	演技計画群	戯曲要約群
目から心を読むテスト[a]	.71(.15)	.69(.12)	.68(.18)	.67(.10)
ヨニテスト[a, b]	.78(.09)	.81(.12)	.84(.10)	.87(.10)
対人反応性指標 共感的関心(5件法, 7項目)	3.37(.70)	3.44(.60)	3.34(.71)	3.37(.61)
物語への移入(7件法, 15項目)			4.48(1.02)	4.56(.80)

注) a. 正答率，b. 二次推論を要求する項目のみを利用

表 2 予測 1 に関する対比分析の結果

従属変数（事後得点）	対比分析				回帰モデル
	対比推定値	*p*	平均値差の95%信頼区間		*adjusted* R^2
			下限	上限	
目から心を読むテスト	-.015	.680	-.085	.056	.433
ヨニテスト	.014	.472	-.025	.053	.635
対人反応性指標：共感的関心	.073	.495	-.139	.285	.739

意取得を行った後，1 日目の事前テスト（約 20 分）では, 他者理解能力課題２つ, 感情的共感の質問紙 1 つ, その他共変量の質問紙への回答を求めた．2 日目は介入（約 60 分）と事後テスト（約 20 分）を実施した．介入では，まず全参加者が実験説明と戯曲やその読み方に関する短いガイダンスを受けた．そののち，練習用戯曲を通読し，群ごとに異なる練習課題に取り組んだ．演技計画群では指定された人物（なお，この人物を「主人公」とした）の戯曲上の指定された範囲のセリフについて，俳優の立場に立ったとして自分であればどのような演技を行うことができるか（演技計画），またそれはどのような意図で行うのか（表現意図）を考えるように教示された．教示内容は安藤(2002)[6]を参考に構成された．数分後，その内容を発話した．発話はすべて録音された．戯曲要約群では戯曲の要約方針を立案し, その後要約を記述した. 練習課題終了後，両群とも，実験者による取り組み例（演技計画群: 発話説明例，戯曲要約群: 要約例）が示された．続いて本番課題が実施された. 参加者は本番用戯曲を 15 分程度で通読したのち，物語への移入尺度に回答した．続いて練習課題と同様の課題に取り組んだ．発話の負荷を低減するため，演技計画群では，内容の構想と発話の機会を 2 セット設けた．事後テストでは事前テストと同じ尺度に回答した.

3. 結果

各条件の事前･事後得点の記述統計量を算出した（表 1）．また，予測 1 について，効果指標ごとに一般線形モデルによる対比分析を実施した（表 2）．従属変数に事後テスト得点，独立変数に事前テスト得点，介入条件，移入得点，介入条件と移入得点の交互作用をおいた．ただし，介入条件は戯曲要約群を-1，演技計画群を 1 とするダミー変数とした. 移入得点は平均値＋1SD の値で中心化した．その結果，いずれの効果指標でも移入が高い場合の介入条件の効果は有意でなく，物語に移入している場合に予測 1 は支持されなかった．予測 2 について，演技計画群に限定し，効果指標ごとに事後得点を，事前得点および移入得点で予測する回帰分析を行った．その結果，ヨニテスト得点の向上を移入が正に予測しており, 予測 2 が部分的に支持された(β = 233, p < .05, 表 3)．また，探索的に，各群 41 名ずつで物語への移入と課題の主観困難度の関連を検討したところ，戯曲要約群では関連が認められなかったが(r = .004, p = .978)，演技計画群で負の相関があった (r = -.358, p = .021)

表 3 物語への移入が社会的能力の変化に及ぼす影響に関する重回帰分析の結果 (N = 41)

従属変数（事後得点）	β^{a}	t	p	adjusted R^2
目から心を読むテスト	.001	.008	.994	.547
ヨニテスト	.233	2.138	.039	.574
対人反応性指標：共感的関心	.054	.785	.437	.841

注) a. 移入尺度得点の標準化偏回帰係数

4. 考察

移入が高い場合に，演技計画群の得点がより高くなるとする予測 1 は支持されず，演技計画の効果は認められなかった. 演技遂行までを行うことの効果（渡邊・楠見, 2021）[5]と比べて，演技計画の効果はとても小さいことが言える．表現を伴わない戯曲読解単独の場合（渡邊他, 印刷中）[12]と同様に，登場人物について，なぜどのような演技をするのかを考え，説明したとしても，介入効果を得るには不十分なのかもしれない．本研究では，演技計画を構想する範囲をやや広く設定し，参加者に自由に発話してもらうことを試みたが，これは参加者にとってやや課題指示が曖昧で負荷の高い活動であった可能性がある．俳優の熟達化を実験的に検討した安藤（2002）[6]では，個々のセリフごとに演技計画を発話させるという，より構造化された手法を取っており，演技計画の具体化にはこの方法がより適している可能性もある.

渡邊・楠見（2021）[5]，渡邊他（印刷中）[12]，および本研究の検証結果を総合すると，短時間・個人を対象とした介入では，演技表現の遂行まで行うことが必要である可能性が推察される．他方で，演技計画群において経験された物語への移入の強さはヨニテスト得点の向上と関連しており，予測 2 を支持する結果が得られた. これは, 必ずしも身体表現を伴わなくても，戯曲の物語世界のイメージが鮮明であるほど，演技計画を作るプロセスにおける物語体験における社会的相互作用の疑似体験が促進され，特にヨニテストが測定するような視点取得能力が向上する可能性を示している．この結果は，物語体験で促進される社会的能力が物語への没入の程度と関わることを示した一連の研究(e.g. Bal & Veltkamp, 2013[16]; 小山内他, 2019[18])とも整合する結果である．特に，視点取得の指標で関連が認められたのは，鮮明に物語イメージを形成した状態

であるほど演技計画時に他者からどのように見えているのか，その視点を意識するようなプロセスが発揮されやすいのかもしれない．物語への移入が強いほど，演技計画の主観困難度が下がったことも踏まえ，産出される演技計画の質的な側面からの検討が必要である．

今後は，演技構築段階が促進効果を持つメカニズムを，物語への移入の影響と併せて検討することが必要である．促進要因について，演技表現それ自体や，本研究が仮説とした演技表現を定めるまでの物語解釈のプロセス，及びその相互作用の可能性について検討が求められる．

文献

[1] Winner, E., Goldstein, T. R., & Vincent-Lancrin, S., (2013) Educational research and innovation. Art for art's sake?: The impact of arts education. Paris: OECD Publishing. (ウィナー, E.・ゴールドスタイン, T. R.・ヴィンセント=ランクリン, S. 原 康正・篠原 真子・袈裟 晶 (訳) (2016). アートの教育学― 革新型社会を拓く学びの技― 明石書店)

[2] Goldstein, T. R., & Winner, E., (2012) “Enhancing empathy and theory of mind”, Journal of Cognition and Development, Vol. 13, pp. 19–37.

[3] 古見 文一・子安 増生, (2012) “ロールプレイ体験がマインドリーディングの活性化に及ぼす効果”, 心理学研究, Vol. 83, No. 1, 18–26.

[4] Sun, J., & Okada, T., (2023) “Interaction in acting training and its different manifestations in novice and professional actors”, Frontiers in Psychology, Vol. 13, 949209.

[5] 渡邊 智也・楠見 孝, (2021) “演劇体験が社会的能力に及ぼす促進効果の実験的検討”, 認知科学, Vol. 28, No. 1, pp. 122-138.

[6] 安藤 花恵, (2002) “演劇の熟達化―脚本読み取りから演技計画, 演技遂行まで―”, 心理学研究, Vol. 73, 373-379.

[7] Adams Jr, R. B., Rule, N. O., Franklin Jr, R. G., Wang, E.,Stevenson, M. T., Yoshikawa, S., Nomura, M., Sato, W., Kveraga, K., & Ambady, N. (2010). “Cross-cultural reading the mind in the eyes: An fMRI investigation”, Journal of Cognitive Neuroscience, Vol. 22, pp. 97–108.

[8] Shamay-Tsoory, S. G., & Aharon-Peretz, J. (2007). “Dissociable prefrontal networks for cognitive and affective theory of mind: A lesion study”, Neuropsychologia, Vol. 45, pp. 3054–3067.

[9] 日道 俊之・小山内 秀和・後藤 崇志・藤田 弥世・河村 悠太・Davis, M. H.・野村 理朗, (2017) “日本語版対人反応性指標の作成”, 心理学研究, Vol. 88, pp.61-71.

[10] 小山内 秀和・楠見 孝, (2016) “物語への移入尺度日本語版の作成と信頼性および妥当性の検討”, パーソナリティ研究, Vol. 25, No. 1, pp. 50-61.

[11] Green, M. C., & Brock. T. C., (2000) “The role of transportation in the persuasiveness of public narratives”, Journal of Personality and Social Psychology, Vol. 79, No. 5, 701-721.

[12] 渡邊 智也・堀 一輝・楠見 孝, (印刷中) “戯曲読解における能動的な読みと社会的能力の関連性”, 認知科学, Vol. 31, No.4

[13] Mar, R. A., (2018) “Evaluating whether stories can promote social cognition: Introducing the Social Processes and Content Entrained by Narrative (SPaCEN) framework”, Discourse Processes, Vol. 55, No. 5-6, pp. 454-479.

[14] Noice, H., (1991) “The role of explanations and plan recognition in the learning of theatrical scripts”, Cognitive Science, Vol. 15, No. 3, pp. 425–460.

[15] Kidd, D. C., & Castano, E., (2013) “Reading literary fiction improves theory of mind”, Science, Vol. 342, No. 6156, pp. 377–380.

[16] Bal, P. M., & Veltkamp, M., (2013) “How does fiction reading influence empathy? An experimental investigation on the role of emotional transportation”, PLoS ONE, Vol. 8, No. 1, e55341.

[17] Calarco, N., Fong, K., Rain, M., & Mar, R. A., (2017) “Absorption in narrative fiction and its possible impact on social abilities”, In F. Hakemulder, M. M. Kujipers, E. S. Tan, K. Bálint, & M. M. Doicaru (Eds.), Narrative absorption (pp. 293-313). John Benjamins Publishing Company.

[18] 小山内 秀和・古見 文一・北島 美花・近藤 千恵子・所 歩美・米田 英嗣・楠見 孝, (2019) “物語への没入体験と社会的能力の向上の関連―成人と児童の比較―”, 認知科学, Vol. 26, pp. 108-120.

[19] 平田オリザ, (2002) “転校生が来る” 平成 14 年度版中学国語教科書 現代の国語２ 三省堂

[20] 菊池 寛, (2016) “父帰る” 菊池寛戯曲集 父帰る・藤十郎の恋 岩波文庫 (初版, 1917)